

専門看護師教育課程修了後の教育支援 「プレ CNS 教育プログラム」

福永 稚子¹⁾, 大市 三鈴²⁾, 向井未年子³⁾, 木村由紀子⁴⁾
佐野 悦子⁵⁾, 菱谷 徳子⁴⁾, 坂口 美和⁶⁾, 辻川 真弓⁶⁾

Educational Support for Those Who Have Completed Certified Nurse Specialist Education Course; “The Education Program for Pre-CNS”

Wakako FUKUNAGA, Misuzu OICHI, Mineko MUKAI, Yukiko KIMURA,
Etsuko SANO, Noriko HISHITANI, Miwa SAKAGUCHI and Mayumi TUJIKAWA

I. はじめに

日本看護協会は、1994年から専門看護師制度を開始し、現在13看護分野が特定されており、2019年12月現在2,519名が専門看護師（CNS: Certified Nurse Specialist, 以下CNS）の認定を受けている。CNSは、複雑で解決困難な看護問題をもつ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供する役割を担っている。CNSの資格を得るためには、看護師として5年以上の実践経験を持ち、専門看護師教育課程として認定された看護系の大学院で修士課程を修了して必要な単位を取得する。さらに臨床看護実践を積みながら、事例に対する理論・概念を基にしたアセスメントおよび実践プロセスに関する筆記試験による専門看護師認定審査に合格することが求められる。

三重大学大学院のがん看護専門看護師教育課程を修了し認定されている者は、現在39名になる。2004年より三重がん看護専門看護師会（現在23名）が発足し、CNSとしての実践能力を高めることを目的に1回/月のミーティングを行い、事例検討を行うなど互いに研鑽を重ねてきた。2017年度からは、大学院を修了し、当該年度に専門看護師認定審査を受ける者（以下、プレCNSとする）が、自身の看護実践をCNSの視点で

振り返り説明する能力を身に着けるために、「プレCNS教育プログラム」を作成し、系統的に支援をしてきた。

専門看護師教育課程修了者を対象とし看護実践能力の向上を目的とした事例検討会（井上ら2019）や教育プログラム（長坂ら2017, 千葉大学大学院看護学研究科2010）はいくつか報告されている。しかし、いずれも対象者には専門看護師として認定を受けた者と受けていない者が混在しており、プレCNSに特化した系統的な教育プログラムの報告はない。本稿では、我々が行ってきたプレCNSを対象とした3年間の「プレCNS教育プログラム」を振り返り、その概要と結果について報告し意義を検討する。

II. 「プレCNS教育プログラム」の概要

1. 教育プログラムの作成

1) 教育プログラム作成の背景

三重がん看護専門看護師会では、かねてより、プレCNSが作成した看護実践報告書を用いた事例検討会を、会員全員で行う形で、プレCNSへの支援を行っていた。しかし、その事例検討会では、参加者がそれぞれ様々にアドバイスをしていたため、検討会終了時に、プレCNSが十分な理解に達していない場合もあった。

1) 三重大学医学部附属病院
2) 伊勢赤十字病院
3) 愛知県がんセンター病院
4) 松阪市民病院
5) 鈴鹿中央総合病院
6) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻

そこで、2017年度からプレCNSが自身の看護活動をCNSの視点で説明する能力を身に付けることを目的とし、少数のCNSとがん看護CNS教育課程の教育に携わる教員（以下、教員とする）が、「プレCNS教育プログラム」と名づけた教育支援を開始した。

2) 作成のプロセス

井部ら（2015）の『専門看護師の思考と実践』や専門看護師キャリアラダー（田村 2015）を参考にし、プレCNSが専門看護師認定を受けるまでに身につけることがのぞましい能力について討議を重ね、教育プログラムを作成した。2017年度のプログラムの開始後も検討と修正を重ね、現在のプログラムの内容は次の通りとなった。

2. 教育プログラムの内容

1) 目的

プレCNSが自身の看護活動をCNSの視点で説明する能力を身につける。

2) 目標

- (1) 臨床現場で起きている現象を分析して問題を特定することができる。
- (2) 問題に関わる人々やとりまく環境を適切にとらえて、活動の方向性を選択できる。
- (3) 理論的根拠をもとに対象への援助を考えることができる。
- (4) 活動の成果を適切に評価でき、自身の課題に気づくことができる。

3) 教育プログラム実践者

中村ら（2011）は、専門看護師教育課程修了者には、教育機関による修了後の継続教育と、専門看護師による支援が必要と述べている。本プログラムでは、CNS4名と教員2名が実践者となった。

CNSは、認定から5年毎に日本看護協会が行う更新

試験を受けスペシャリストとしての職務を継続できる。2017年度のプログラム開始時は、初回の更新を受けた8～10年目のCNS3名と初回更新前の3年目のCNS1名を選定した。メンバーに、初回更新前のCNSを選定した理由は、プレCNSであった時期の記憶が新しく、プレCNSの立場から見たプログラムに対する意見を反映しやすいと考えたからであった。

2019年度からは、将来のメンバー交代を見据え初回更新前の2名が加わり計6名となった。

4) 教育プログラム受講者

三重大学大学院においてがん看護専門看護師教育課程を修了し、該当年度に専門看護師認定審査を受験する予定の者に対して、教員が本プログラムを紹介し、参加を希望した人を対象とした。

5) 教育プログラムの内容

プログラムは全3回の研修会からなり、講義1回と事例検討2回で構成した。事例検討は、1回目の事例検討で得た気づきを、受講者が習得できているかを受講者とプログラム実践者がともに確認できるよう2回とした。いずれも受講者が参加しやすいように週末に実施した。各回の目標及び所要時間と方法は表1の通りであった。また、プログラムのスケジュールは図1の通りであった。臨床で勤務するプレCNSが参加可能な各回の間隔を検討し、第1回から3回までの期間は7週間とした。専門看護師認定審査が7月～10月に行われたことから、プログラムは4月末から8月の時期に開催した。また、プログラム受講者がプレCNSとしての実践を開始してからプログラムに参加できるよう、受講者が臨床に戻ってからプログラム開始までに一カ月程度の期間を設けた。

第1回開催の前に、プログラム実践者同士が、教育プログラム全体と第1回の講義内容について話し合い内容を洗練させた。

第1回は、CNSの思考と実践に関する解説と、CNS

表1 教育プログラム各回の目標及び所要時間と方法

回	目標	所要時間	方法
第1回	受講者が自身の活動を説明できるように講義を通じて各役割の視点を学ぶことができる	3時間30分	講義 ディスカッション
第2回	受講者が自身の活動を講義とてらしあわせて考え、事例をどの役割からみることが定まる 受講者が各役割の視点にそって整理し修正点に気づくことができる	受講者1人につき50分	事例検討
第3回	受講者が修正した事例を見直しさらに洗練できる（論理的に展開できる）	受講者1人につき50分	事例検討

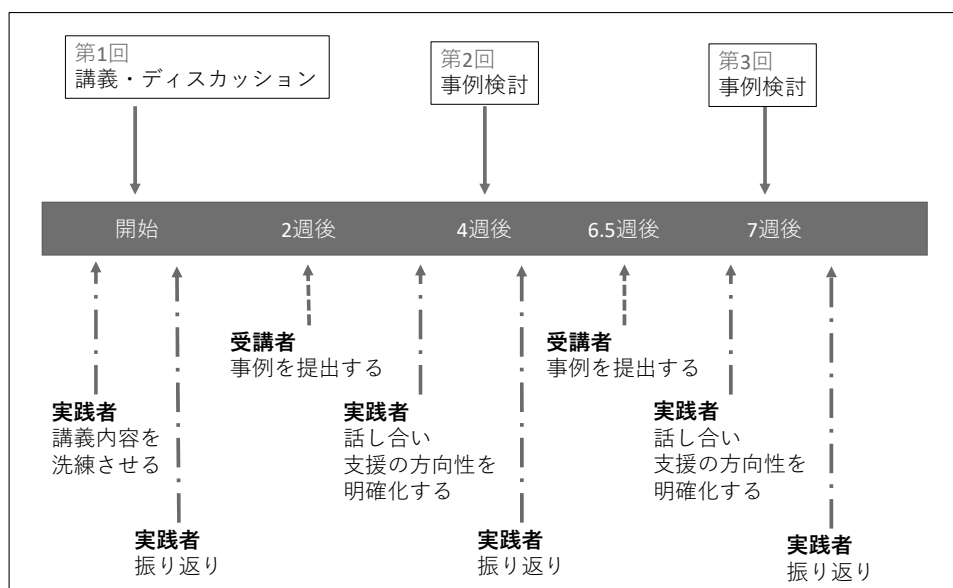


図1 教育プログラムのスケジュール

表2 教育プログラム（第1回）の詳細

内 容	所要時間
オリエンテーション CNSの思考と実践について	40分
「実践」－私の経験をCNSの視点でふりかえる－	40分
「コンサルテーション」－私の経験をCNSの視点でふりかえる－	50分
「調整」－私の経験をCNSの視点でふりかえる－	30分
「倫理調整」－私の経験をCNSの視点でふりかえる－	30分
まとめと振り返り	20分
計3時間30分	

の6つの役割のうち4つ（実践，コンサルテーション，調整，倫理調整）について，CNSが30～50分間の講義及び受講者とのディスカッションを行った（表2）。それぞれの役割について専門看護師キャリアラダー（田村2015）を示したのち，CNSとしての問題の明確化や支援の方向性などの思考が受講者に分かるようにCNSが経験した事例を用いて端的に説明した。コンサルテーションでは，Underwood PR（1995）の7つのプロセス①システムの参入②問題の明確化③目標と期待する結果の明確化④データ収集⑤計画⑥計画の実行と経過および結果の評価⑦フォローアップにそって説明した。いずれの場合も，CNSが実際に経験した臨床での出来事を受講者がイメージしながら討議できるよう工夫を行った。また，受講者がCNSとして求められる能力に照らし自身の課題を考えるきっかけにできるように，日本看護協会が毎年の審査時に講評する「専門看護師認定審査に関する受験者の課題」を，受講者と共有した。

第1回終了後，受講者は実践，相談，調整，倫理調整役割のいずれかの事例を専門認定看護師審査で2018年度まで求められていた看護実践報告書のフォーマットを使用してまとめ，2週間後にプログラム実践者に提出した。プログラム実践者は，その看護実践報告書を読み込み，第2回の前に事例の問題や受講者のもっている視点等を話し合い，受講者への支援の方向性を明確化し共有した。

第2回では，開始時に受講者の①この事例と役割を選択した理由，②活動をCNSの視点で説明するにあたっての悩みを受講者とプログラム実践者の間で共有した。プログラム実践者はそれらと事前に話し合った支援の方向性を踏まえ，受講者が気づけるように支持的に問いかけながら検討をすすめていった。終了時に受講者から研修会で得た気づきや学びを聞いた。

第2回終了後から第3回は，第1回終了後から第2回までと同様のことを繰り返した。第3回の実例は，事例そのものや役割を変えるか，あるいは第2回と同じ

事例を再構成するかを受講者と相談して決定した。

研修会ごとに、プログラム実践者は振り返りを行い、受講者が目標に達していたかを確認した。

3回の研修会の終了後に、受講者へ記述式のアンケートを送付した。本教育プログラムの評価を目的としていること、回答内容によって受講者に不利益を生じることがないことを、口頭および文書で説明した。アンケートへの回答をもって協力に同意とみなした。アンケート内容は、日程や期間の適切さ、教育方法に対する感想や改善点、教育効果などであった。

3. 教育プログラムの実施

教育プログラムは、2017年度から2019年度までの3年間、毎年1セッションを実施した。プログラム実践者の役割を表3に示す。

第1～3回すべての研修会において、CNSが進行役を担った。CNSは第2回と3回の前には、受講者が提出した看護実践報告書を読み込み、その事例の問題やCNSとしての活動の方向性のアセスメントを共有した。受講者がすでに持っている視点とさらに加えると良い視点を話し合い、支援の方向性を明確化し、受講者が自ら気づけるような問いかけ方を検討した。この事前の話し合いは毎回2時間を要した。第2回と3回の当日は、事前に共有した支援の方向性からぶれないように注意しながらディスカッションをすすめた。受講者の気づきを導けるように、CNSは受講者の反応にあわせ、その場での的確な発問や受け答え、臨機応変な対

応が必要であった。そのため、実際にディスカッションに参加するプログラム実践者と、そのディスカッションを見守り、内容の補足や話の流れの軌道修正を行うプログラム実践者に分かれて、ディスカッションを行った。

研修会ごとに、プログラム実践者は、CNSの受講者への問いかけの意図と受講者の反応を振り返った。そして、受講者の傾向から、CNSがどう発問することが受講者にとって効果的かを検討し次回に活かした。この振り返りには毎回1時間を要した。

4. 教育プログラムの結果

3年間で計7名が参加した。受講者のうち認定審査を受験したものは6名で、全員が合格し、現在はそれぞれの施設でCNSとして活動している。

1) 受講者の気づきとプログラム実践者からみた受講者の変化

研修会終了時に受講者が述べた気づきについてプログラム実践者が作成した記録と、プログラム実践者が行った振り返りの会議録から、受講者の気づきとプログラム実践者からみた受講者の変化を抽出した(表4)

(1) 受講者の気づき

受講者は事例をCNSとしてアセスメントする視点が分かり、事例において自身が担う役割に気づいていた。

(2) プログラム実践者からみた受講者の変化

受講者は、自身の看護活動をCNSの役割の中に落とし込み、看護活動の意図を明確にしたり、言語化して

表3 プログラム実践者の役割

CNSと教員	教育プログラムの作成と評価、修正
CNS	第1回～3回の進行とディスカッション
	第1回の講義 第2、3回前に受講者への支援の方向性を決定
教員	第1回～3回のスーパービジョン

表4 受講者の気づきとプログラム実践者からみた受講の変化

回	受講者の気づき	プログラム実践者からみた受講者の変化
第1回	事例をどうまとめたらよいか見えてきた 役割にそってレポートを書くことができていない ので意識して整理していきたい	受講者が自分に引き付けて考えることができていた
第2・3回	コンサルテーションの事例だと考えていたが倫理調整の事例だと気づいた ディスカッションの場で、コンサルテーションのプロセスにそって整理しなおし理解が深まった 課題適用応型のコンサルテーションとして事例をとらえていたがプロセス適応型のコンサルテーションであることに気づいた	事例を端的に言語化できるようになった 現象を分析しなおし問題を明確にできていた 組織の風土や問題に関わる人々の考えを把握し、CNSが真に担った主たる役割やコンサルテーションのタイプ・種類に気づいていた 役割を理解し実践の意図が明確化していた CNSとしての自己の課題に気づいていた

まとめることができた。また、この教育プログラムを通して自己の課題に気づくこともできていた。

2) 受講者のアンケートから得られた意見

(1) 日程や期間について

日程や期間は適切であった。

教育プログラムの時期は、専門看護師認定審査申請書類の提出期間と重ならない時期が適切であった。

(2) 教育方法について

講義は、参考書ではイメージしにくいCNSの思考過程を噛み砕いた内容だったので分かりやすかった。プログラム実践者が経験した事例についてCNSとしての思考を聞くことは、どの事例をどのような役割をもって考えればよいかの参考になった。

事例検討では、自身の関わりの意図や自身の気がかりなどを問いかけられたことで、気づかなかった点に気づき、実践の根拠の明確化や意味付けができた。

(3) 教育効果について

事例のレポートを作成したとき自分の看護活動をうまく表現できず、事例をまとめる方向性が分からなくなっていたが、ディスカッションを通して自身に見えていなかった点が見えて、自分の傾向やCNSとしての課題、実践の際に意識しなければいけないことに気づくことができた。

他者に伝わる文脈にする工夫や焦点を絞って言語化する方策を学べ、臨床での実践に有用だった。

III. 考 察

看護職が行う事業を評価する方法として、中板(2009)はPlan-Do-Check-Action (PDCA) サイクルに基づき、企画段階での企画評価(input)、実施段階での評価(out put)とそれによってもたらされる結果評価(outcome)の3側面から評価を行うことを推奨している。本稿でもこれに基づき、この3側面から本プログラムの評価を実施した。

(1) 実施評価

講義は、受講者の「参考書ではイメージしにくいCNSの思考過程を噛み砕いた内容だったので分かりやすかった」「プログラム実践者が経験した事例についてCNSとしての思考を聞くことは、どの事例をどのような役割をもって考えればよいかの参考になった」という意見から内容は適切であったと評価した。プログラム実践者は、問題の明確化や支援の方向性などCNSの思考を受講者に分かるように伝えようと努めてきた。講義に用いる事例には、CNSの役割を端的に表わした事例が適切であった。

井部(2015)は、「実践のリフレクションとは、コミットして視野が狭くなった看護師に対して、異なった視座やフレームを示すことで、提供されている看護実践や看護師自身を否定することなく、ケアの方向性を見直すことやケア内容を多様にしていく作業である」と述べている。本教育プログラムの事例検討について、受講者は「自身の関わりの意図や自身の気がかりなどを問いかけられたことで気づき、実践の根拠の明確化や意味付けができた」と述べていた。本教育プログラムを通して、プレCNSは異なった視座を得てケアの方向性を見直す作業ができていた。第2回と3回の前に、プログラム実践者が受講者への支援の方向性を明確にし、研修会当日にその方向性にそって恣意的ではなく意図的にディスカッションをすすめたことは、受講者の実践のリフレクションを支援するのに有効であった。

(2) 結果評価

受講者の気づきや、プログラム実践者からみた受講者の変化から、受講者は、CNSとして事例をアセスメントする視点が分かり、事例において自身が担う役割に気づいていた。また、看護活動の意図を明確にできていた。さらに、CNSとしての課題に気づくことができていた。これらのことから、教育プログラムの目標は達成できたと評価した。

受講者はアンケートにおいて「事例のレポートを作成したとき自分の看護活動をうまく表現できず、事例をまとめる方向性が分からなくなっていたが、ディスカッションを通して自身に見えていなかった点が見えた」「他者に伝わる文脈にする工夫や焦点を絞って言語化する方策を学べ、臨床での実践に有用だった」と回答していた。また、プログラム実践者は、「研修会を通して受講者が、行った看護活動の意図を言語化できるようになった」と受講者の変化を確認していた。これらのことから、本教育プログラムはプレCNSが自身の活動を説明する能力を身に着けるための一助となったと考えられた。

(3) 企画評価

研修会の日程は、受講者から適切と評価された。専門看護師認定審査を受ける同年度に教育プログラムを開催しており、認定審査の書類準備期間の作業と重ならない時期での開催が適切であった。

講義1回と事例検討2回という教育プログラムの構成は、実施可能であり、目標の達成に至り適切と評価した。

中村ら(2010)は、専門看護師として認定をうけていない専門看護師教育課程修了者には、教育課程での

学びを実践に適應する教育ニーズがあることを明らかにしており「理論を複雑な看護実践に適應するには、丁寧な事例分析を基に理論を適應し評価していくことが必要であり、スーパーバイズを伴う事例検討が不可決」と述べている。受講者が臨床に戻りプレ CNS としての実践を開始してから教育プログラムを開始することは、プレ CNS が教育課程で学んだ理論を実践に結びつけて考える機会をつくるという意味があった。そして、CNS のスーパーバイズを伴う事例検討を通して、プレ CNS が自身の看護活動の意図を明らかにできるよう支援していくことは、プレ CNS が理論を看護実践に適應していく一助になったと考えられた。

1セッションの受講者数は少なく、プログラム実践者の教育プログラムにかかる労力の大きさに対する費用対効果は一見低いと捉えられるかもしれない。しかし、本教育プログラムは、受講者が少数だからこそ目的とした「プレ CNS が自身の看護活動を CNS の視点で説明する能力を身に着ける」支援となり有意義であったと考えられた。

IV. おわりに

本教育プログラムの特徴は、受講者がプログラム実践者である CNS とのディスカッションを通して受講者自ら気づきを得て、看護活動の意図を明確にしていくところにあった。本教育プログラムは、専門看護師教育課程で学んだ理論を実践に適應するというプレ CNS の教育ニーズを満たす一助となると考えられた。

本教育プログラムの構築や開催を通して、プログラム実践者自身が得られる学びも多い。今後は、実践者が交代しても教育プログラムを継続していけるようにすることが課題である。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない

文 献

- 井上菜穂美, 西尾里美, 他 (2019) 専門看護師の看護実践能力向上に向けた聖隷 CNS 事例検討会の活動について, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 27, 21-29.
- 長坂育代, 眞嶋朋子, 他 (2018) チーム医療を促進する臨床判断に焦点を当てた専門看護師教育プログラムの試案, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 40, 49-54.
- 千葉大学大学院看護学研究科 (2010) 専門看護師育成・強化プログラム 成果報告書. 千葉大学大学院看護学研究科.
- 井部俊子, 大生定義監修, 専門看護師の臨床推論研究会編集 (2015), 専門看護師の思考と実践, 第1版, pp2-10, 医学書院, 東京.
- 田村恵美, 諏訪部高江, 他 (2015) 専門看護委員の自己開発能力を促進するためのキャリアラダー開発, 日本 CNS 学会誌, 1, 49-51.
- 中村伸枝, 白井いづみ, 他 (2011) 専門看護師として認定を受けていない専門看護師教育課程修了者の認定申請に向けたサポートニーズ, 千葉看護学会会誌, 17 (1), 17-24.
- Underwood PR (勝原裕美子訳), コンサルテーションの概要—コンサルタントの立場から, インターナショナルナーシングレビュー, 18 (5), 4-12, 1995.
- 中板育美 (2009) 公衆衛生看護活動における評価の現状と課題, J.Natl.Inst.Public Health, 58 (4), 349-354.
- 井部俊子, 大生定義監修, 専門看護師の臨床推論研究会編集 (2015), 専門看護師の思考と実践, 第1版, pp170-176, 医学書院, 東京.
- 中村伸枝, 白井いづみ, 他 (2010) 専門看護師として認定を受けていない専門看護師教育課程修了者の教育ニーズ, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 33, 31-37.
- 種吉啓子 (2014) 小児看護専門看護師の候補性が認定審査を受けるまでの実情, 日本看護学教育学会誌, 24 (1), 29-39.